
発達障害×働く力

就労支援の実践ガイド

梅永雄二編著

金剛出版, A5判300頁, 4,180円, 2025年10月刊

(ルーテル学院大学名誉教授) 福山和女

本書を手にした時に目に入ってきたのが、タイトル『発達障害×働く力』の中の「×」という「文字」である。その意味合いは、一つには「発達障害」に「働く力」を掛け合わせて生み出されるものとは何かという疑問を投げかけているのではないかと捉えることができる。二つ目は、「発達障害」対「働く力」と解すれば、「障害程度」と「働く力の量」との対比で、重度になれば働く力が弱まるということなのだろうか。副題に「就労支援の実践ガイド」とある。

本書を読み続けると、2025年度の厚生労働省等の調査結果などを提示して、令和7年現在、わが国では数多くの就労者が発達障害という課題と取り組んでいる実情が理解できる。特に、支援者としての支援の展開過程や方法などについて、社会福祉制度上の対応としての事業所、センター、機関などが、心理学、精神医学、産業領域をも含めた多職種協働体制による取り組みを展開している実情があざやかに描写されている。

また、「発達障害」の範囲は、児童の調査結果などを参考に、「SLD（限局性学習症：旧学習障害）、ADHD（注意欠如・多動症：旧注意欠陥多動性障害）、ASD（自閉スペクトラム症：旧自閉症・アスペルガー症候群等の広汎性発達障害）」を含めており、成人に至っては、その種別は広範囲の対象者を包含している。

本書からは、その中でも、焦点を「就労支援」に特化しているため、発達障害の種別は支援機関や事業所により多種多様であるという事実も理解できる。全体的に令和8年の各就労支援の組織単位、支援者単位での取り組みと工夫、開発、そしてその成果が実例をもって描き出されている。就労支援についての有益な情報を十分にくみ取ることができる。

今一度本書のタイトルの「×」の意味を再考すると、第三の意味が想定できる。それは、「発達障害」

と人の「働く力」とは交互作用的に影響を及ぼし、素晴らしい相乗効果をもたらすものであると言えないだろうか。本書を探究する意味合いを見出せたように思う。

さて、本書を手にした時、タイトルだけでなく、本書の帯に書かれたメッセージ：知っておきたい発達障害を持つ人の就労支援の「いま」！ が目に留まった。その瞬間、とてもあたたかな、懐かしい気持ちを抱いたのは評者だけだろうか。評者は、福祉や心理学の分野で、臨床ソーシャルワークを展開してきた経験から、「人の尊厳の保持」という原理を大切にしてきた。1980年代後半からソーシャルワークの分野では、教育領域、支援センター、福祉機関、企業の支援者にとって「障害論」が主テーマとなり、「障害者」「障害を持つ人」「障害のある人」という表現、障害者というラベル付けなど、さまざまな見解が論じられたことを思い出した。就労支援についても「発達障害者への」という表現は、その頃のラベル付けに近い感覚を醸し出す。できれば、その人たちは、発達障害と取り組んでいるのであり、その人すべてが発達障害であると捉えなくてもよいかもしれない。評者自身も全人的ケアをモットーにして就労支援を展開していくことを今一度肝に銘じたいと感じた。
